■研究十二月往来〈265〉

野守の鏡

和田　萃

大和を舞台とした能「葛城」や「野守」などは、大和に育って今も住み、日本古代史を研究する私には、まことに興味深く思われる。古代の史実が中世後期に至ってどのように変容し説話化されたのか、またそれがどうした形で現在に残っているか、関心をもつ。奈良の銘菓に「野守」があり、また春日大社の神饌に由来する「餡餇饅頭」があるのも、古都ならではのことだろう。

まず「野守」の梗概をみよう。

出羽の羽黒山の山伏が大峯山（山上ヶ岳）・葛城山（金剛山を指す）に登って修業するため、大和に赴き、南都の名所を訪ねる。

そこへ、「春日野の飛火の野守出て見れば今幾程ぞ若菜摘む」と謡いながら老人が現れた。その姿を目にした山伏は、近くの由緒ありげな水の由来を尋ねる。

老人が語るには、「野守の鏡」と称する水であるが、実は昔、昼間は人となって春日野を守り、夜には鬼となって傍らの塚に住む鬼が所持していた鏡であるとのこと。すなわち鬼神の持つ鏡を野守の鏡と言い、また野守の影が水に映るところから、その水を野守の鏡とも称するという。山伏はまた、「はし鷹の野守の鏡」とも歌われたのは、この水のことかと尋ねると、そうだと答え、その由来を語る。

昔、この野に天皇の御狩があった折、行方知れずになった御鷹を、野守が水の底に見出し、そのことを天皇に近侍する狩人に知らせた。狩人が近寄ってみると、白斑の鷹が映っていたが、よく見ると、木（古居）にとまっている鷹の姿が水鏡に映っているのだった。鷹は首尾よく捕えられて、野守は面目を施したと語る。

それで山伏は真の野守の鏡を見せてほしいと懇願すると、野守は鬼の所持する鏡だから、映る様はまことに恐ろしく、鏡を見続けることはできますまい、鷹の映った水鏡を御覧なさいと言って、塚の内に入ってしまった。山伏が鬼神の住む塚の前で法力を尽くして祈ると、天地を動かし鬼神をも感じさせたので、野守の鏡が現れ、恐ろしい鬼神の姿や天界・地獄道の様子が次々と映し出された。その後、鬼神は大地を踏んで地獄の底に入ってしまった。

「野守」の舞台となった飛火野は、平城京外京の東方域に広がる御蓋山（三笠山。標高二八三メートル）の裾野で、現在も奈良県新公会堂から春日大社を含む奈良公園の一帯に、春日野の地名（奈良市春日野町）が残っている。飛火野は、春日大社の一の鳥居から二の鳥居に向かう参道の右手（南側）に広がる丘陵で、鷺池（蓬莱池）北側の岡から鹿園にかけての一帯である。

奈良時代の春日野では、御蓋山の麓で神祀りが行われたり、諸王子や諸臣の子弟らの遊楽の場所であり（『万葉集』巻六―九四八・九四九）、春ともなれば人々の若菜摘みの場所ともなっていた。平城京内では碁盤目状に道路や水路が巡らされ、宅地化していたに対し、東の郊外には野原が広がり松林が散在していたのである。

養老元年（七一七）二月一日に、遣唐使の一行が「蓋山（御蓋山）」の南で天神地祇を祀っており（『続日本紀』）、また藤原太后（光明皇后）は甥の藤原朝臣清河が入唐大使に任命された際、春日野で神を祀っている（『万葉集』巻十九―四二四〇）。春日大社は神護景雲二年（七六八）に創祀されたが、それ以前の春日野を描いた「東大寺山堺四至図」には、御蓋山の西側に「神地」と記された一画がみえている。御蓋山の裾野は、阿倍氏や藤原氏が御蓋山の地主神を祀る場所だったらしい。

御蓋山は春日大社の背後にあり、神体山として知られる。御蓋山は三笠山とも表記されるので、すぐ北側にある三重になった丸い山、若草山とよく混同されるが、まったく別の山である。近鉄奈良駅や荒池付近から見ると、奥の春日山（標高四九七メートル）の手前に秀麗な円錐形の山がある。それが御蓋山。阿倍仲麻呂が唐土で詠んだ「天の原」の歌も、御蓋山を歌ったものである。平城遷都以前から、阿倍氏は春日野にも勢力を広げていた。

春日野に設けられた「神地」や、飛火野を守護したのが野守であった。

天智七年（六六八）五月五日に近江の蒲生野で催された薬猟に際し、額田王と大海人皇子（後の天武天皇）との間に、人口に膾炙する歌が交わされた。額田王の歌、「あかねさす紫野行き標野ゆき野守は見ずや君が袖振る」（『万葉集』巻一―二〇）に、紫野・標野・野守が歌われている。紫野とは、布を紫色に染めるために用いられる紫草を栽培していた野。その根（紫草根）を煎じて布を染め、媒染剤として椿の木灰を用いた。紫色は禁色。身分の高い人のみに許された服の色であった。人が紫野へ立ち入らないように、目印（標）として杭などを立てたことから標野と呼ばれ、その標野を管理・保護したのが野守だった。

飛火野の野守は、烽（烽火台）を守護するために置かれたらしい。平城遷都直後の和銅五年（七一二）正月二十三日に、河内国の高安烽を廃して、始めて高見烽と春日烽を置いた（『続日本紀』）。烽は狼煙を上げて情報を伝達するシステム。天智朝に西日本を防衛するため、各地に朝鮮式山城が築かれ、烽が併設された。高安山（大阪府と奈良県にまたがる山。標高四八八メートル）の烽は、難波と飛鳥を結ぶもの。その経路が平城遷都とともに変更され、生駒山に高見烽、春日野に烽が設置されて、難波と結ばれたことから、春日烽の周辺が飛火野と称されるようになったのである。

そうした春日烽の野守が中世後期にも記憶されており、また春日大社周辺の野を守護・管理する野守の姿が、能の「野守」に反映されたともいえよう。

難しいのは、野守の鏡・水鏡である。姿を映す水鏡としては、鷺池・荒池はふさわしくない。奈良高校に通っていた頃から、春日野や飛火野に親しんできた。これまでの見聞からすると、一の鳥居のすぐ東南、飛火野の西北隅ともいうべき所に所在する「雪消の沢」が、野守の鏡・水鏡に相当するのでは、と思う。常に清水が湧き出しており、二間四方ほどの小さな浅い水溜りとなっている。冬でも水温が一〇度前後であるところから、雪が降っても積もることはなく、雪消の沢と称されてきた。古来、こうした湧水は神聖視されている。十二月十七日に催行される春日大社若宮社の「おん祭」では、一の鳥居近くの「影向の松」で諸芸能が奉納される。雪消の沢は影向の松とも近い。あるいは「はし鷹」に関わって、木居（影向の松）が雪消の沢の水鏡に映ることもあったのではないだろうか。

さらに難解なのは、なぜ鬼神が出現し、また鬼神が鏡を所持しているのかという点である。鬼神の出現については、説明がつくように思う。末永雅雄博士がかつて『大和の古墳』で指摘されたように、春日野の鹿園の近傍には、二〇基近い小円墳が所在していた事実がある。その被葬者の魄を鬼神とみなしたのだろう。

鬼神の持つ鏡については憶測の域を出ないが、晋代に道教の最高指導者、天師であった葛洪（二八三～三六四）の『抱朴子』（岩波文庫に所収）に基づくかと思われる。巻十七の登渉篇に、道士が山中に入る際の入山法を記すが、径九寸以上の鏡を背後に懸けると、老魅が姿を変えて近づいても、その本性が必ず鏡に映し出されるとする。「野守」では、鬼神の持つ鏡には、鬼神のみならず森羅万象が映し出されるとしていて、やや異なる。

しかし修験道と鏡が深く関わっていることに留意すると、「野守」の鬼神には『抱朴子』の影響があると言ってよい。中世後期に大きな影響力をもった吉田神道では、天理大学附属図書館所蔵の神道書をみると、道教の影響が著しい。ワキが羽黒山の山伏であり、大峯・葛城に入山する前に野守の鏡を見たとの大筋も、右の推測と深く関わるかと考える。

（わだ・あつむ 日本古代史 京都教育大学名誉教授）